

ユネスコスクールとしての横浜シュタイナー学園 振り返りと展望

■研修の位置づけ

1. 研修を実施	<p>ユネスコスクールの目標や理念をおさらいする</p> <ul style="list-style-type: none">・ ユネスコ成立の背景とユネスコ憲章・ 学習の4つの柱・ ESD および ESD for 2030・ SDGs・ SDGs 達成に貢献するための学びの3領域 <p>これらを振り返った後、学園の教育との関係を明らかにする</p> <ul style="list-style-type: none">・ 上記の要素が学園の教育の実践や理念とどのように呼応し合うか・ ユネスコスクールとして意識すべき要素・ サステイナブルスクールとして地域社会に発信、連携していくべき要素
2. 野ばら	<p>成果を学園紀要にまとめる。(編集担当：広報グループ)</p> <p>*ここに助成金を使います</p>
3. 各方面へ贈呈	<p>「野ばら」をユネスコスクール関係者や地域の関係者に贈呈し、あわせて報告会をご案内する。</p> <p>感想などをフィードバックしていただく。</p> <p>*送料にも助成金を使います</p>
4. 報告	<p>様々な機会を捉えて成果を報告する</p> <ul style="list-style-type: none">・ ユネスコスクール関係者や地域に向けた報告会を開催(11月あたり?)・ ユネスコスクール関東ブロック大会(7月30日・日曜日/東海大学)・ ユネスコスクール全国大会(2024年1月??/会場は地方になる可能性大)・ その他

■横浜シュタイナー学園のユネスコスクールの歩み

・第一期：加盟を目指した時期

- 2010年1月、京田辺シュタイナー学校がユネスコスクールに加盟
- 学園だより26号（2010年11月）に経緯の記事
- 2011年1月、横浜シュタイナー学園、東京賢治シュタイナー学校が加盟

・第二期：出会いの時期

- 全国大会への継続参加（学園だより26号）
- 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会(KAN)の設立

横浜市立永田台小学校住田先生、県立有馬高校・望月先生のコーディネートで神奈川県の連絡会が発足した。最近では、関東ブロック大会の分科会として開催が多い。

2013年8月1日	第1回神奈川県ユネスコスクール・セミナー 横浜国立大学附属鎌倉中学校
2015年1月10日	第2回神奈川県ユネスコスクール・セミナー 神奈川県立有馬高校（望月先生の学校）
2015年8月1日	第1回ユネスコスクール神奈川県大会 横浜市立幸ヶ谷小学校
2015年9月19～20日	東海大 UNESCO ユース・セミナー
2015年12月4日	ACCU 全国大会プレセミナーにおいて協議会設立会議
2016年3月28日	神奈川県ユネスコスクール連絡協議会 横浜シュタイナー学園十日市場校舎
2016年7月29～30日	東海大 UNESCO ユース・セミナー
2016年8月27日	第2回ユネスコスクール神奈川県大会 横浜シュタイナー学園十日市場校舎
2017年9月3日	第3回ユネスコスクール神奈川県大会 湘南学園

- 2014年ユネスコスクール世界大会

- 世界大会記念優良事例集へのエントリー

- 長井先生「化学・農業実習を通して地球環境を学ぶ」

- 世界大会に寄せる宣言への寄稿

- 『ユネスコスクールの今 — ひろがり つながる ESD 推進拠点』に引用される

- 学内の取り組み

- ユネスコ運動との連携

- ◇ 書き損じ葉書プロジェクトへの参加

- 新治市民の森の活用

- ◇ ほたるの夕べ

- ◇ 吉武美保子さん里山講演会（2014年3月22日）

- ◇ 田んぼ、竹切り、その他の保全活動

- ◇ 竹かご編み体験

- ◇ 周辺探訪会（学内、学外）

- *コーディネーターの重要性

- 地球規模の気候変動

- ◇ 講演会（石原さん）

- ・第三期：外への発展期

- サステイナブルスクール（ESD重点校事業）2014

2016年、急増したユネスコスクールの質の底上げのために、全国から24校が書類選考され、3年間の研修型パイロット校形成が行われた。

*異校種間の交流による学びあい、シナジー効果が期待された。

*ホールスクールアプローチの視点による学校評価研修が柱だった。

サステイナブルスクール事業での取り組み：

- 2016年9月：採択決定

- 2016年11月：気候変動ダカール国際ワークショップに英語科内村先生が参加（ユネスコ本部・機関包括型アプローチ事業参加校から各国2名が参加）

- ほぼすべての研修に参加（横山、佐藤、石原）

成果物：

- ホールスクールアプローチ・デザインシート
- 『キラリ発進！サステイナブルスクール ～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～』1～3
- 『サステイナブルスクール報告書 2019』（日本語版／英語版）

● 定期レビュー

2022年度より、文部科学省により、5年ごとのユネスコスクール定期レビューがはじまりました。加盟年の早い学校から選定されるとのことで、横浜シュタイナー学園は初年度のレビュー対象校218校に入りました。

- 活動チェックシートの提出
- オンライン研修会への参加
- 有識者書面レビュー

レビュー：

- 環境、異文化、地域体験とバランスの取れた先進的な数々のESDの取り組みを実践されていることに敬意を表します。このまま取り組みを継続し、他校への模範であり続けていただくことを望みます。
- 環境、異文化、地域体験とバランスの取れた先進的な数々のESDの取り組みを実践されていることに敬意を表します。このまま取り組みを継続し、他校への模範であり続けていただくことを望みます。
- 横浜北部最大の里山での環境保全活動、「体験型『暮らしと仕事』」学習プロジェクト、イスラム教・イスラム文化の学びなど、活動計画の多くを達成している。

改善点の指摘：

- 学習指導要領に沿った教育課程ならびに年間指導計画を提示してほしい。
- ユネスコスクールの意義と役割を今一度確認して、学校全体としての取り組みを検討していただきたい。
- ESDの推進拠点として、学校のホームページを活用し、その役割を示してほしい。
- ユネスコスクールとして、学校間交流や国際的な行事への参加、国際的な取り組みを行ってほしい。

- 学内ならびに学外の方による学校評価を行い、学校運営や地域社会との係わりに反映していただきたい。

● 学園が採択された SDGs(ESD)アシストプロジェクト助成一覧

2011 年度 第 3 期	物理学を通じた電気と社会の関わりの学び、英語を通じた異文化理解の取り組み
2012 年度 第 4 期	児童生徒の集団における自他境界の身体的理解と言語的理解
2014 年度 第 6 期	6～9 年生の 4 年間のつながり、および、教科間のつながりを意識した〈ESD カリキュラム〉構築の取り組み
2016 年度 第 8 期	循環型社会理解の基礎となる体験型〈暮らしと仕事〉学習（継続プロジェクト）
2019 年度 第 11 期	循環型社会理解の基礎となる体験型〈暮らしと仕事〉学習 * 11 期の報告は公式サイト的事例報告に収録されました
2021 年度 第 13 期	循環型社会理解の基礎となる体験型〈暮らしと仕事〉学習
2022 年度 第 14 期	暗示型ホールスクールアプローチ見える化プロジェクト * 2023 年度、これから実施するプロジェクト

・ 第四期：内への発展期 ???

今回の研修から始まる年間プロジェクトを、「内への発展期」と位置づけ、すべての先生方が社会に向けて発信していける言葉をもつことを目指したいと思います。

■ユネスコスクール

● ユネスコ(UNESCO/ United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)

1946 設立。国連の内部組織ではなく、外郭組織。高い独立性。

創立当初の会合では、国の代表としてではなく、個人名で議論が行われていた。

【ユネスコ憲章前文】

戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。

【国連広報センターの説明】

ユネスコは 1946 年に設立され、異なる文明、文化、国民の間の対話をもたらす条件を創り出すための活動をする。一般に共有する価値観を尊重することに基づき、持続可能な開発、平和の文化、人権の順守、貧困の削減を目指す。ユネスコの活動領域の中でとくに力を入れていることは、すべての人々が教育を受けられるようにし、自然科学と社会科学の研究を促進し、文化的アイデンティティの表明を支援し、世界の自然遺産や文化遺産を保護し、情報の自由な流れと報道の自由を促進し、かつ開発途上国のコミュニケーション能力を強化することである。

ユネスコとの対話：

「世界共通の目標や取り組み」として、ユネスコが次々と出してくる概念や用語を理解しつつ、そのステージの上に立ち、それに踊らされずに自らの立場をユネスコの言葉で発信していくことを目指したい。相手の立場やニーズにも虚心に耳を傾けつつ。

● ユネスコの教育観：1996 年のドロール・レポート 教育の 4 つの柱

ユネスコの教育理念として、21 世紀教育国際委員会（フランスのジャック・ドロールが委員長で「世界の賢人 14 人」が委員）が 2 年かけて作成した報告書「学習：秘められた宝」では、以下の 4 つの柱が示された。ヴァルドルフ教育との高い親和性がある。

- Learning to know
- Learning to do
- Learning to live together, Learning live with others
- Learning to be

* 2021-2022 年：5 本目の柱に Learning to become が加わった（らしい）

● ベルリン＝ルドルフ・シュタイナー教育芸術友の会とユネスコ

1996年に日本を巡回した「世界に広がるシュタイナー教育展」は、1994年にジュネーブで開催された第44回ユネスコ国際教育会議で行われたヴァルドルフ教育パネル展の成果を受けて開催したものでした。手違いから、実際に展示されたパネルは別の展示会のものとなりましたが、日本語に訳されたパンフレット「世界に広がるシュタイナー教育」は、ジュネーブの会議のオリジナル版でした。

この冊子の扉で当時のユネスコ事務局長フェデリコ・マヨール氏は書いています。

「すべての子どもにその子だけの個性を認めること、子ども相互の間に信頼関係を築くこと、そしてそれぞれの子どもが自分の能力と可能性を自ら見だし、それを伸ばし、自分に誇りを持てるように導くこと – これが、今日の教育の課題です。シュタイナー教育も国際的な活動のなかでまさにこの課題と取り組んでこられたのであり、その意味ではユネスコとシュタイナー教育とは、同じ問題意識のもとに活動を行ってきたと申せましょう。」

この関係を築いたのは、ベルリンのルドルフ・シュタイナー教育芸術友の会ですが、その志がESDやSDGsの世界的な潮流に乗って、具体的な教育実践のなかに合流してきているのです。

*京田辺シュタイナー学校のホームページより https://ktsg.jp/school/unesco/	
1994年	ジュネーブで行われた『ユネスコ第44回国際教育会議』にシュタイナー教育展が招致される。この展示会はその後も世界各地で繰り返し開催されている。
2001年	ユネスコ理事会は、世界のシュタイナー学校をサポートしている組織「シュタイナー教育友の会」(Friends of Waldorf Education – Rudolf Steiner Schools)を、“シュタイナー教育の理念と倫理規範は、ユネスコのそれと呼応している”として、ユネスコ公式NGOに認定。[評価書 161 EX/38]
2004年	ユネスコスクール・ネットとシュタイナー教育友の会は、『国際教育者会議』をスイス(バーゼル)で共同主催。
2006年	ドイツのユネスコ国内委員会と協力して、『ユネスコ・世界ユース会議』をドイツ(シュトゥットガルト)で開催。
2006年	シュタイナーの人間観をふまえた教師、医師、父母、療法士、治療教育者たちが専門領域を越えて対話を重ねていく『コリスコ会議』をユネスコ本部で開催。
2006-7年	ユネスコとシュタイナー教育友の会の代表者によってワークショップを組織化し、バイルートのユネスコ地域事務局が開催した教育プログラムなどに参画。
2008年	ユネスコ理事会は、上記のようなシュタイナー教育友の会の活動を高く評価し、ユネスコ公式NGOとして新たな6年間の協働を宣言。[評価書 179EX/35]

- ユネスコスクール／ASPnet

ユネスコの理念を実践する学校のネットワーク。UNESCO Associated Schools (Project) Network。「ユネスコスクール」は、じつは日本国内でのみ通用している愛称。

大学ネットワークは ASPUnivNet と呼ばれている。関東地域は、玉川大学、東海大学が担当している。

NPO の学校は、2009 年京田辺、2011 年横浜、東京賢治に認定。

ユネスコスクールの目的と活動テーマ（ユネスコスクール公式サイトより）：

<https://www.unesco-school.mext.go.jp/about-unesco-school/aspnet/>

- ユネスコ憲章と国連憲章に通ずる理念として、基本的人権、人間の尊厳、ジェンダー平等、社会的進歩、自由、公正、民主主義、多様性の尊重、国際的な連携などを推進すること。
- ユネスコの任務である教育・文化・科学・コミュニケーションの分野における平和のための国際協力に資する「アイディアの実験室」として、組織や人材の能力開発と政策やモデルの構築に貢献するために、国際間・地域間協力を進めること。
- 斬新で創造的な教育手法を開拓し、グローバルな概念を学校レベルの実践に落とし込んで実験的機能を果たすことにより、教育制度や政策の変化を促すこと。
- 国際ネットワークの一員として、同じような志を持つ世界中の学校と知見を共有し、パートナーシップを育むこと。
- 国際社会の構成員であるという意識を持ち、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献すること。特に、SDGs の目標 4（教育）に関連して、以下のテーマに重点的に取り組むこと。
 1. 地球市民および平和と非暴力の文化（Global citizenship and culture of peace and non-violence）
 2. 持続可能な開発および持続可能なライフスタイル（Sustainable development and sustainable life style）
 3. 異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重（Intercultural learning and the appreciation of cultural diversity and heritage）

- ESD

Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育

- 1992年 リオ・地球サミット

当時 12 才だったセヴァン・カリス・スズキの伝説のスピーチ（部分）
学校で、いや、幼稚園でさえ、あなたがた大人は私たちに、世のなかでどうふるまうかを教えてくれます。たとえば、

- 争いをしないこと
- 話しあいで解決すること
- 他人を尊重すること
- ちらかしたら自分でかたづけること
- ほかの生き物をむやみに傷つけないこと
- 分かちあうこと
- そして欲ばらないこと

ならばなぜ、あなたがたは、私たちにするなということをしているんですか。あなたがた大人はいつも私たち子どもを愛していると言います。本当なのでしょうか？ もしそのことばが本当なら、どうか、本当だということ言葉をなく、行動で示してください。

- 2002年 ヨハネスブルグ・サミット

持続可能な社会への協働の機運

小泉首相から ESD の提言「国連 持続可能な開発のための教育の 10 年」

- 同年「国連 持続可能な開発のための教育の 10 年」国連で採択

日本政府はユネスコスクールを ESD の 10 年の拠点と決め、文部科学省主導でユネスコスクールの数を増やしていった。この流れにヴァルドルフ学校も乗った。

- 2004年文部科学省教育改革シンポジウム「持続可能な開発と 21 世紀の教育」の企画を永田佳之さんと吉田敦彦さんが担当。これがきっかけに、ユネスコパリ本部と日本のヴァルドルフ学校が結びつき、ユネスコスクール認定へとつながった。

- 2007年 日本政府が公式にユネスコスクールを ESD の推進拠点に位置づけた

- 2022年：ESD for 2030 の採択。SDGs 達成のツールとしての ESD への変化。

- SDGs

2000 年に始まった MDGs（ミレニアム開発目標）の後継として 2015 年に採択。17 の目標。2030 年までに達成すべき持続可能性に向けた目標。

- 近年の動き：ユネスコスクールの3領域

1. 地球市民教育（GCED）と平和・非暴力の文化

人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民

Think Global, Act Local

地球市民アイデンティティの育成、新しいレベルの自我の発展

韓国発 → 日本では低調、だが、ヴァルドルフ教育との親和性は高い！

2. 持続可能な開発のための教育（ESD）と持続可能なライフスタイル

ESD が環境教育としてあらためて位置づけられた

3. 異文化間学習と文化の多様性および文化遺産の尊重

文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解

1と3の項目をどう理解するか？（小貫さんコメント）

- 1：人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民の強調点は「人権」
- 3：文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解の強調点は「多様性」

言ってみれば「平等」と「自由」の違いです。平等と自由は同じコインの裏と表ですが、歴史的には、平等が先に取り組まれた課題で、自由は平等の上に初めて成り立つものとして現れた課題だと思います。

■ヴァルドルフ教育とユネスコスクール

暗示的 ESD（永田佳之さんによる呼称）

- ESD と銘打った授業はない
- 学校の校庭、校舎、カリキュラム、教師の人格、すべての教育環境に ESD の精神が宿っている。学校のあらゆる活動の本質に、ESD 的な意味が見出される。
- 「私たちが一人の教師として、教育機関として、または教育管理者として、教室での日々の持続可能性の手本となることができれば——学校組織や校舎のデザインまでもが持続可能性のイデオロギーを反映していれば——学校の大人たちによって手本が示されているような持続可能性の理念があれば——あるいは、教室で行われる授業内容が世界に対する不思議、畏敬の念、そして愛情を生み出すようなものであれば——そのとき、あらためて授業で持続可能性について教える必要はなくなる。持続可能性の価値は学校のエートスを通じて、子どもが入学したその日からはぐくまれることになるであろう。」

ホールスクールアプローチ／ホールインスティテュートアプローチ

イギリス・ブレア政権時代にサステイナブルスクール運動として展開
日本のサステイナブルスクール事業のテーマに設定された

サステイナブル・マップ



ホールスクールアプローチ・デザインシート

→ 細分化、総花的になりがち

→ 学校のアイデンティティへと統合するものは何か？



日々の活動における 有機性、生命



それをどのように見だし、表現するか

様々な切り口が考えられる

有機性、いのち を生み出すもの

理想主義と熱

子どもの内側に生きて活動している精神へのまなざし、わたし自身においても
信頼と愛 = クラスと学校にかたちを与えるもの

カリキュラム = 子どもたちが出会う世界の地図

教育芸術 = 活動に内包された芸術性
反復に強い
子どもの主体性と内発性を引き出す源泉

芸術 = 学園を包み込む柔らかな気分を生み出すもの

四季とともにある学び

学びと成長の共同体としての教員会

保護者の協働、保護者の変容

サステナビリティの意味の刷新（人類の内的な発展への視座）

空間的な広がりとして

垂直軸	学年間の有機的つながり		長井先生の事例 カリキュラム
水平軸 1	教科間を横断する有機的連携 エポックと専科の連携だけでなく、ひとつのエポックを構成する要素間の連携、エポック単元間の連携もある（日本史－世界史）		カリキュラム 手仕事、外国語 オイリュトミー 体育
水平軸 2	地域との連携	里山（NGO と連携） 大家さんの畑（大家さん） 公園（愛護会を結成） 地域（自治会、乗馬クラブ）	行政や NPO コーディネーター

精神性／スピリチュアリティ

Learning to be ↓ 精神性	Learning to know	思考
	Learning to do	意志
	Learning to live together	感情

「精神性」の具体的な内容

知情意と自我	上述の 4 つの柱を貫く発達観によってカリキュラムと教授法が編まれている。
人間と世界の関係性	人間（わたし）を中心に据え、わたしと世界の関係性という問いのかたちで世界の事象を学ぶことで、わたしと世界との深いレベルでの相互共存（インタービーイング）が育まれる。
世界の構成要素	色彩とフォルム、空間と動き 4つのエレメント 人間、動物、植物、鉱物 法則（数学、幾何学、物理、化学、文法、etc.） 対話、協働 文化、法と政治、経済
経済	経済活動における利己心の克服（6年生？）

■ ユネスコ・コミュニティとの対話

● デモクラティックな潮流との対話

ルドルフ・シュタイナーの自由観の援用 → 行為に主体性があれば、それは自由である
この文脈における「内発性」という切り口が重要なキーワードとなる
本当に子どもたちが内発的になっているかどうかの、検証は必要

● 相手が求めている事柄へのコミットメント

わたしたちの言葉は、いまは、対話している相手が求めるものではないかもしれない。
相手のニーズのところまで歩み寄ることが、時には必要。相手の立場に立って、自分の
知見から相手を代弁することだってできる。一緒に高みを目指していける。
ルドルフ・シュタイナーの示唆。「公立学校のなかでもヴァルドルフ教育の要素を実践
することは意味がある。あらゆる試みが為されねばならない。」

● 社会との関わり

学校が地域社会を変容させていくことが求められている
高学年では様々な可能性が出てきている → きちんと評価していきたい
コーディネーターの存在が大きい → きちんと評価していきたい
先生方が発言の場を求めていくこと → 外へ